

一般社団法人 日本看護学教育学会

－ 研究推進・研究助成委員会 －

WEB 研究推進ワークショップ

鈴木敏恵 講演資料

AI時代の「研究と評価」の羅針盤

－ 未来の看護教育 6つのスピリット －

AI時代の看護研究

－ 未来教育プロジェクト学習の手法で、
概念から現実へ －

プロジェクト学習

ポートフォリオ

対話コーチング

意志ある学び

2026年7月25日（土） 13:00－16:00

Zoomによる同時双方向型での開催

[60 分]

講 師

鈴木 敏恵

シンクタンク未来教育ビジョン代表

一級建築士・未来教育デザイナー

AI 時代の看護研究

ー 未来教育プロジェクト学習の手法で、概念から現実へ

研究と評価は、実現したい未来へ向かうプロジェクトの一部

■ AI × 未来教育スペース
AI × Future Education Space

ProjectBasedLearning



Concept & Vision Design | 鈴木敏恵 2025

看護研究の原点は、目の前の現実にあります

看護研究では、「心理的安全性」「看護実践能力」「学修支援」「評価」「コンピテンシー」など、目に見えにくい概念を扱うことが多くあります。研究や評価には、現実を整理し、意味を見いだす重要な役割があります。一方で、概念から始まり、概念の整理や分析だけで終わる研究は、誰のどのような現実をよくしたのかが見えにくくなることがあります。

AI は、既存研究の収集、要約、分類、比較、分析、仮説の提示、評価項目の作成、文章化などを急速に行えるようになっていきます。概念の整理やデータ分析だけで完結する研究は、今後、その多くを AI が担う可能性があります。

看護は現実を対象とするものです。目の前の人の表情、呼吸、声、沈黙、身体の変化、生活環境、家族との関係、その人が大切にしているもの。そこから「何とかしたい」という課題意識が立ち上がります。

そこにビジョンを描き、必要な事実と根拠を獲得し、他者と対話し、自ら判断し、
現実に役立つ「知の成果」を生み出す。これが、AI 時代の看護研究の方向。

AI 時代の看護研究を支える「6つの視座」

AI を使う技術ではなく、研究全体を方向づける人間の視座

■ AI時代の羅針盤 — 6つのスピリット

The Compass for the AI Era - Six Guiding Spirits

ProjectBasedLearning



Concept & Vision Design | 鈴木敏恵 2025

1. 現実直視
2. ビジョン
3. 知の成果
4. 事実・真実希求
5. 意思決定
6. 俯瞰

1 現実直視

目の前の人、教育、医療、地域、社会の現実を見る。概念や数値だけでなく、現実に行き来していることから課題を見いだす。

2 ビジョン

誰に、どのような未来を実現したいのかを描く。「何のための研究なのか」を明確にする。

3 知の成果

研究によって得た知識を、教育プログラム、支援ガイド、演習モデル、評価ツールなど、他者に役立つ形にする。

4 事実・真実希求

AI の回答や既存の理論をそのまま受け入れず、根拠、情報源、現実との一致を確かめる。

5 意思決定

根拠ある情報をもとに、他者と対話し、自ら判断する。研究の目的、方法、対象、成果の還元を最終的に決めるのは人間。

6 俯瞰

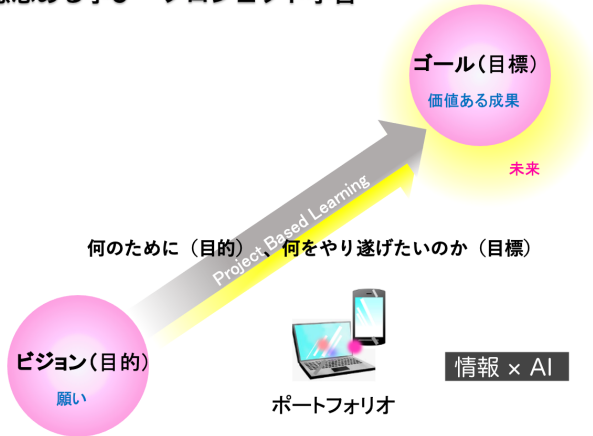
研究対象だけを切り取らず、本人の生活、医療の現状、教育環境、地域、制度、社会全体を見渡す。

AI は、人間の代わりに研究の目的を決める存在ではありません。看護の現実を深く見詰め、知の成果を生み出すためのイネイブラーです。

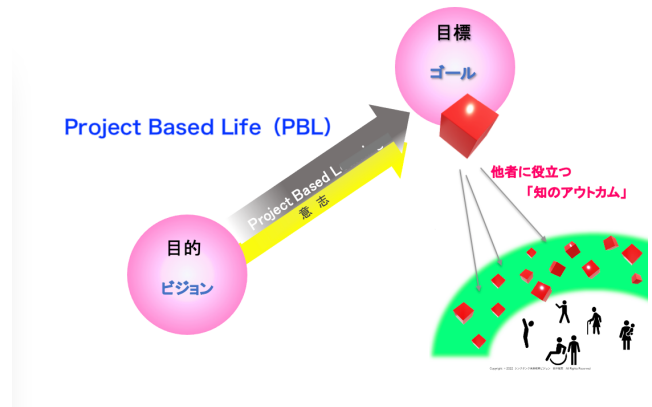
看護研究をプロジェクトとして捉える

現実 → 課題 → ビジョン → ゴール → 情報獲得・研究 → 評価 → 知の成果

意志ある学び - プロジェクト学習



プロジェクト のゴール=「他者に役立つ知のアウトカム」



プロジェクトの基本構造

現実	目の前で、何が起きているのか。
課題	誰が、どのような困難を抱えているのか。何をよくする必要があるのか。
ビジョン	誰に、どのような未来を実現したいのか。
ゴール	その未来へ向けて、何を明らかにし、何を生み出し、誰に提案するのか。
情報獲得・研究	ビジョンを実現するために必要な事実、データ、声、先行研究を手に入れる。
評価	生み出した成果が、対象者や教育、医療の現実に役立つものになっているかを確認める。
知の成果	教育プログラム、演習モデル、支援ガイド、チェックリスト、評価ツールなどとして社会へ還元する。

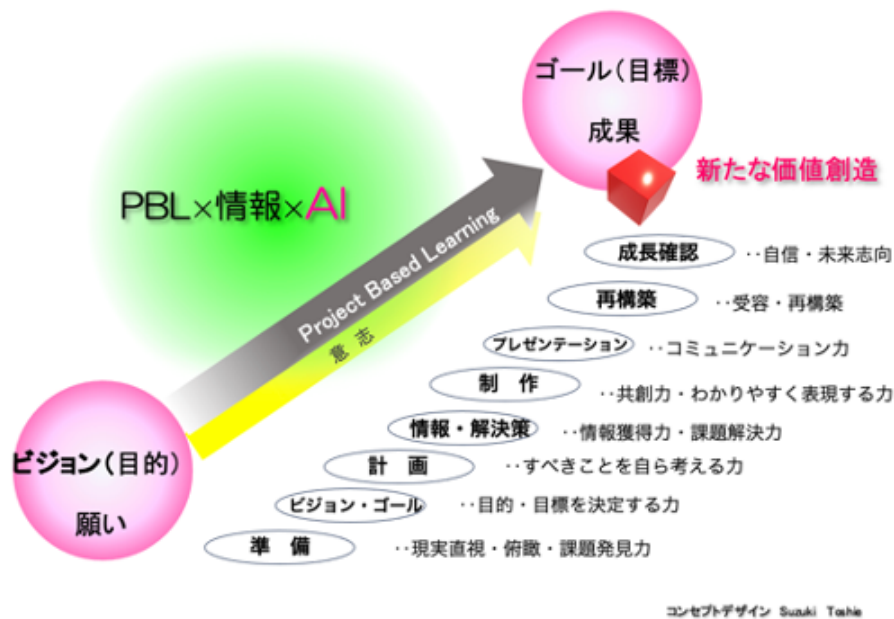
研究は、ビジョンを実現するために必要な事実と根拠を手に入れるプロセスです。
評価は、ビジョンへ近づいているかを確認め、よりよくするためのプロセスです。

研究テーマは、プロジェクトのどこに位置しますか？

研究や評価は、ビジョンとゴールへ向かうプロセスの一部

あなたが取り組んでいる「研究テーマ」「評価テーマ」は、下の PBL 基本フェーズのどこに位置するのでしょうか。

意志ある学び-プロジェクト学習[基本フェーズ]



研究テーマは、プロジェクト全体ではありません。

現実から課題を見だし、ビジョンを描き、ゴールへ向かうプロセスの一部です。

研究・評価で扱うこと	位置しやすいフェーズ	ゴールへどうつながるか
実態調査・課題の把握	準備／情報・課題解決策	現実になにが起きているかを明らかにする
介入・教材・支援モデルの開発	計画／制作	ビジョンを実現する「知の成果」を具体化する
効果測定・評価	再構築／成長確認	ゴールへ近づいたかを確認、改善する

「研究テーマ」を概念で終えてはいけません。

目の前の現実立脚し、誰のどのような未来を実現したいのかを人間が決め、根拠ある情報をもとに「知の成果」を生み出す。そこに、AI では代替できない看護研究があります。

看護教育の研究・実践テーマを PBL へ展開する 〈1〉

看護教育分野の研究領域を参考に新たに構想した架空の事例

1 安心して学べる看護教育環境づくり

プロジェクトテーマ 看護学生が安心して考えを伝え、挑戦できる学習環境

ビジョン 看護学生が、間違いや不安を恐れず、自分の考えや疑問を安心して伝え、仲間とともに学べる環境を実現したい。

ゴール 安心して発言・相談・挑戦できる条件と、不安やためらいを感じる場面を調べ、授業や演習に活用できるチェックリストと改善案を提案する。

知の成果 看護学生が安心して学べる授業・演習環境チェックリスト

2 患者との関わりを深める実習指導づくり

プロジェクトテーマ 学生が患者との関わりの意味に気づける実習指導モデル

ビジョン 看護学生が、患者との関わりを深く振り返り、自分の言葉や感情、判断の意味に気づき、よりよい援助につながられる実習指導を実現したい。

ゴール 教員が学生の記録のどこに着目し、何を根拠に問いかけや助言を行っているのかを明らかにし、対象理解と援助的関係を支える指導モデルとして提示する。

知の成果 教員の判断と対話が見える実習指導モデル

3 一人ひとりの特性と強みを生かす実習支援

プロジェクトテーマ 学生の特性と強みを生かせる看護実習環境

ビジョン 一人ひとりの看護学生が、自分の特性や強みを生かしながら、安心して看護実践能力を伸ばせる教育を実現したい。

ゴール 学生の情報の受け取り方、注意の向け方、感覚、学習行動と、実習で感じる困難や強みを調べ、個別性に応じた学習方法、実習環境、指導上の支援策を提案する。

知の成果 学生の特性と強みを生かす看護実習支援ガイド

4 子どもと家族の未来を考える小児看護演習

プロジェクトテーマ 子どもと家族に必要な看護を自ら判断できる事例演習を提案します

ビジョン 看護学生が、子どもの発達、病状、家族の思い、生活背景を総合的に捉え、その子と家族に必要な看護を自ら判断し、実践できるようにしたい。

ゴール 学生が具体的な事例を通して、情報獲得、アセスメント、看護判断、援助計画、評価までを一体的に学べる事例展開演習モデルを開発し、その活用方法を提示する。

知の成果 子どもと家族の未来を考える小児看護事例展開演習モデル

看護教育の研究・実践テーマを PBL へ展開する 〈2〉

研究成果を、現実を活用できる「知の成果」として社会へ還元する

5 学生の判断と対話を支えるデジタル実習記録

プロジェクトテーマ 学生・教員・臨床指導者をつなぐデジタル実習記録の活用方法

ビジョン デジタル実習記録を、単なる記録の電子化ではなく、学生の気づき、判断、対話、成長を支える学びの道具として生かしたい。

ゴール 学生・教員・臨床指導者が実習記録をどのように活用し、どのような対話や学修支援を行っているのかを調べ、学生の看護判断を支える活用モデルを提案する。

知の成果 学生・教員・臨床指導者をつなぐデジタル実習記録活用モデル

6 在宅療養者の生活を支える遠隔看護教育

プロジェクトテーマ 在宅療養者が安心して暮らし続けられる遠隔看護支援

ビジョン 在宅療養者が、住み慣れた地域で安心して生活続け、体調の変化を早期に捉えて重症化を防げる看護を実現したい。

ゴール 看護師が、画面越しでも表情、呼吸、生活状況、測定値、本人の訴えなどを統合して判断し、必要な支援につなげられる遠隔看護教育プログラムを開発し、演習方法と評価方法を提示する。

知の成果 在宅生活を支える遠隔看護教育プログラム

7 体調と学びを両立できる看護学生支援

プロジェクトテーマ 体調に配慮しながら看護師を目指せる学修環境

ビジョン 体調上の困難がある看護学生が、必要な配慮を受けながら学びを継続し、自分の力を生かして看護師を目指せる教育環境を実現したい。

ゴール 学生が授業、演習、実習、生活のどのような場面で困難を感じ、どのような支援を必要としているのかを調べ、本人、教員、実習施設が共有できる具体的な学修支援ガイドを提案する。

知の成果 体調と学びを両立するための看護学生学修支援ガイド

本資料について

本資料の事例は、看護教育分野で取り上げられている研究領域を参考に、鈴木敏恵が PBL の視点から新たに構想した架空の事例です。特定の研究者の研究計画・研究成果を示すものではありません。

参考：一般社団法人日本看護学教育学会「研究助成・過去の研究助成一覧」<https://jane-ns.or.jp/grant/>

未来教育デザイン・PBL 構想・監修：鈴木敏恵 <https://suzuki-toshie.net/>

<未来教育 資料 1> PBL マトリックス [AI×情報]

PBLマトリックス [A I×情報]			
構想・設計：鈴木 敏恵			
PBL基本フェーズ	AI活用の主な方向	AI × 情報	ポートフォリオ
1. 準備 (Preparation) ・現実直視	■課題発見 ■現状分析支援 目の前の現実を見て「課題」を見出す	☐ 課題発見: 多角的視点からの課題発見 ☐ 情報収集: 地域データ分析 ☐ 課題の見出し: 状況や事象の背景分析 ☐ 画像認識: 画像認識でパターン発見 ☐ 関連事象分析: 論文・ニュース記事を解析 ☐ 対話: AIとの対話による「課題」妥当性確認	☐ 対象者の生活シート ☐ 地域の社会資源リスト ☐ 施設・資源の写真 ☐ 関連疾患の現状データ ☐ 地域・箇所のマップ
2. ビジョン・ゴール (Vision & Goal) ・目的と目標の明確化	■目標設定 支援 ■思考の言語化 ビジョンとゴールの言語化支援	☐ 類似事例検索: 成功プロジェクトや社会的モデルの ☐ 表現補助: 目標・ミッションの明確化支援 ☐ 言語化支援: 思考整理・目標文のブラッシュアップ ☐ 構想比較: 複数案を提示してゴールの妥当性を検 ☐ 自己内省: AIとの対話で意志や動機を明確化	☐ ビジョンゴールシート ☐ 関連するメモ ☐ 類似事例・・
3. 計画 (Planning) ・構想力×時間活用	■行動計画支援 ■工程設計 すべきことを自ら考える力	☐ タスク分解: 目標達成に必要な行動項目を抽出 ☐ スケジュール生成: 期間と優先度を考慮した工程案の提示 ☐ リスク予測・状況予測: 計画上の弱点や(天候、物流)予測 ☐ 進行テンプレート提示: チャートなどの可視化支援 ☐ 計画評価: AIによる現実性・効率性のチェック	☐ 必要な情報リスト ☐ 工程表(役割・戦略・・) ☐ 地域の行事・文化期間
4. 情報・課題解決策 (Information & Solution) ・知的・戦略思考	■情報収集 ■発想支援 情報を手にいれ解決策を考える	☐ 信頼情報検索: 根拠あるデータ・論文・統計の提示 ☐ 要約・翻訳: 難しい論文の要約・多言語資料を簡潔に整理 ☐ アイデア発想: 多角的視点からの解決策提案 ☐ 事例比較: 他分野の応用事例を抽出 ☐ 因果分析: 課題の背景要因をAIが構造化・可視化	☐ 課題・現状・将来予測 ☐ 意識・アンケート ☐ 周辺インタビュー ☐ 対象者の居住環境 ☐ 解決策の思考プロセス
5. 制作 (Production) ・視覚×論理性	■成果物制作支援 ■表現補助 解決策を具体する	☐ 制作補助: ポートフォリオのどの情報を活かすべきか ☐ デザイン生成: テキスト・動画のデザイン提案・作成。 ☐ 文章構成: 原稿・提案文・レポートの骨子作成支援 ☐ プロトタイプ生成: 試作品・ビジュアルモデルの生成 ☐ 編集・校正: 言葉の整え・視覚的構成・誤字・文体の改善 ☐ パラグラフ整え: 専門情報の要約、比較表の作成 ☐ 画像編集AI: 写真や図を自動補正、編集・視覚効果向上。	☐ 他者の参考デザイン ☐ 制作に関わるパラグラフ ☐ レアウトの試行錯誤 ☐ 凝縮ポートフォリオ
6. プレゼンテーション (Presentation) ・コミュニケーション力	■準備支援 ■伝達力強化 プロセスと成果を他者に共有、 フィードバックを得る	☐ スクリプト作成: 意図を明確かつ論理的にする展開の提案 ☐ 効果的な構成の提案: シンプル・視認性・情報整理を提案 ☐ Q&A対策の練習: 予想質問をリストアップ・応答の練習 ☐ 表現改善: 話し方・トーン・テンポの最適化提案 ☐ 発表練習: AI音声認識によるリハーサル・フィードバック	☐ 想定Q&Aメモ ☐ フィードバックシート ☐ キーワードメモ
7. 再構築 (Reconstruction) ・改善力	■改善支援 ■再設計支援 ブラッシュアップ: 改善・再設計する	☐ 分析: フィードバックを整理・改善提案。 ☐ 参加者の意見を分析し、最も影響のある改善点を抽出。 ☐ 改善提案生成: 修正箇所の具体化・再構築プラン提 ☐ バージョン比較: 改訂前後の差分抽出・評価 ☐ 代替案提示: 新たな方法や視点を提示	☐ 参加者からのメッセージ ☐ 修正箇所のメモ ☐ アップデートアイデア
8. 成長確認 (Reflection) ・成長志向	■自己評価支援 ■メタ認知支援 自分の変化と成長を確認し 未来へつなぐ	☐ 自己評価項目作成: 学びのクオリティーを可視化 ☐ 振り返り支援: 気づきや成長点の言語化 ☐ ポートフォリオ整理: 活動記録の構造化・見える化 ☐ 成長分析: 行動履歴や思考変化の抽出 ☐ 次の目標提案: 次フェーズへの課題・方向性を提案	☐ PBLで得た自己成長 ☐ 感謝メール ☐ 次のプロジェクトのアイデアメモ

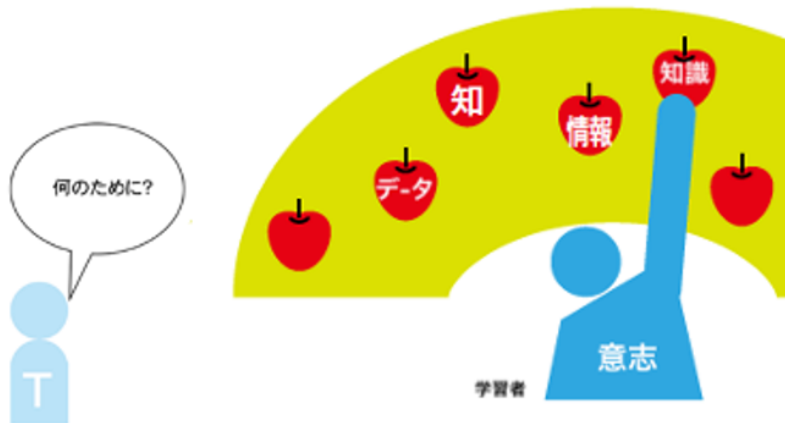
Copyright ©2026 シンクタンク未来教育ビジョン 鈴木敏恵 All Rights Reserved

* 鈴木敏恵: AI 時代の羅針盤. 看護教育, 67(3):280-291, 2026(医学書院)

さあ！「意志ある学び」を実現！

— AI×情報×プロジェクト学習

講師：鈴木 敏恵

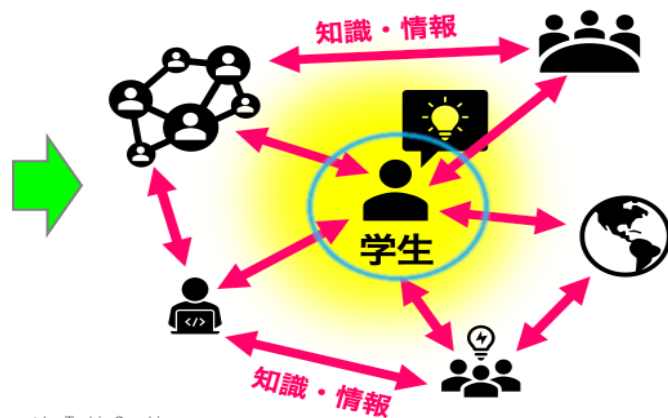


与えられた学びから、「意志ある学び」へ

過去(DX 前)



未来(DX 後)



Design & Concept by Toshie Suzuki

さあ！「意志ある学び」を始めよう

AI×情報×プロジェクト学習

講演・図解・実践事例・資料はこちら



<https://suzuki-toshie.net/news/9188/>

QRコードから未来教育の最新情報へ

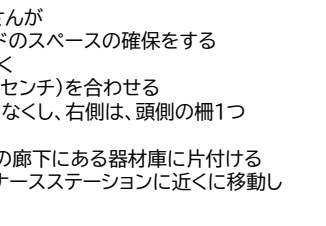
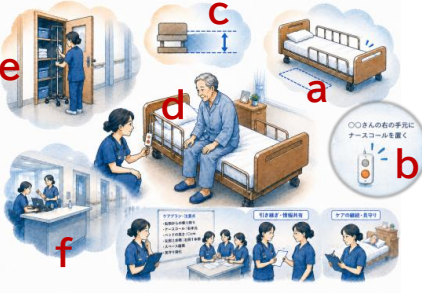
未来教育デザイン — 人間中心の AI 活用

ストーリーで教育をデザインする。ステージは目の前の「現実」、物語の中心はたった1人の「大切な人」

PBLマトリックス【ep. 現実直視】

「大切な人」を守る課題発見

ベッドサイド危険予測トレーニング

展開	詳細	身につく力
準備 ・チーム(3~5人)にて実施 ① まず自分たちが「課題発見」を書き込む	・書き込み用、大きめA3『写真(紙上シミュレーション用)』 ・写真・図面(平面図など) ・R(リアル)10シート(患者設定 事前条件)を生かし「大切な人」を描く 病室の写真や平面図へ「大切な人」にとってリスクとなり得る「場所」と「課題」を書き込む ■ 危険要因 ■ 観察項目 ■ 優先順位 ■ 起こり得る事故 *自分で考えてから仲間と思考を共有する 	・1人の人間をリアルに描く力 ・情報収集力 ・「現実」からの課題発見力 ・知識と現実を結びつける力 ・思考の言語化
② AI活用 AIに「課題発見」させる 詳細は次ページ	■ 病室写真 AIに: ■ 転倒リスク ■ 感染リスク ■ せん妄リスク ■ 見落としやすい視点 プロンプト *写真、前提条件など入力 	・AIリテラシー ・最適なプロンプト ・個人情報保護の意識
③ 照らし合わせ AIによる課題発見と自分たちの課題発見を照らし合わせる	■ 自分が気づけたこと ■ AIが気づいたこと ■ 自分が見落とししたこと を対話する。(人間ではの盲点など) 「その人ならではの課題」 患者の身体・精神機能、行動特性、生活背景などを統合し、その患者にとって危険に繋がることを見出し、書き出す。 	・協働する力 ・「知の共有」により能力向上を自覚
④「課題解決」 看護実践知の言語化	リスクを判断し、具体的な「対策・課題解決の行動」を考えだす a. 80代、脳梗塞で左不全麻痺のある〇〇さんがベッドから乗り降りする右側のベッドサイドのスペースの確保をする b. 〇〇さんの右の手にナースコールを置く c. ベッドの乗り降りが安全にできる高さ(何センチ)を合わせる d. ベッドの左側は柵をつけ、降りるところをなくし、右側は、頭側の柵1つ足元の柵は外す。合計3つの柵を使う e. 点滴スタンドは点滴していない時は病棟の廊下にある器材庫に片付ける f. 軽度の認知症がある〇〇さんの病室は、ナースステーションに近くに移動し見守もれる位置にする 	・リスク評価力 ・課題解決力 ・思考の言語化・考える力 ・自分の考えを伝える力 ・倫理的判断力 ・共創
⑤「現実空間で実践」 AI=俯瞰・整理・可視化 人=意味づけ・個別化・実践	a. 右側のベッドサイドのスペースの確保 b. 右の手にナースコール c. ベッドの安全な高さ d. ベッド柵の位置 e. 点滴スタンドは片付ける f. 病室は、ナースステーションのそば AIは、見落としや危険要因に気づく視点を広げる。 看護師は、その情報を患者の生活や思いと結びつけ、実際の看護につなげる。 	・アイデア ・実践力 ・センシング力 ・行動力
⑥ AI活用 再現性のある看護実践知へ	・課題発見から課題解決の行動、検証までのプロセスをポートフォリオ化 ・AIで課題発見から課題解決→実行までのプロセスを再編集 ・状況や対象者が変わっても再現性のある「知の成果」	・実践を振り返り、より良くする力 ・改善を主体的に進める力

Copyright ©2026 シンクタンク未来教育ビジョン 鈴木敏恵 All Rights Reserved

AI 活用 ― 病室の「課題発見」

② AI 活用の詳細

プロンプト (AI への指示)

写真を添付します。この病室の患者は 84 歳男性、脳梗塞後で強いふらつきがあります。意識は清明です。食事と排泄はゆっくりですが自立しています。この患者にとって危険となる箇所と課題を発見し、該当箇所を矢印でその理由も写真内に書き込んでください。



AI の回答

写真に、危険箇所・課題・理由を矢印で書き込みました。ベッドの高さとキャスター、ナースコール、履物、点滴スタンド、ベッド周囲の動線など、入院患者の転倒防止で確認される項目を反映しています。椅子、履物、点滴スタンド、ベッド周囲の動線などを、**患者が立ち上がり、方向転換し、歩く場面を想定して**捉えています。

病室の課題発見 | 転倒・転落リスク

84歳・男性・脳梗塞後／意識清明／食事・排泄は自立しているが、ふらつきが強い患者を想定

① 肘掛けのない椅子

立ち座りで手をつく場所がなく、ふらついた時に支えにくい。安定した肘掛け付き椅子が望ましい。

② ベッドの高さ・キャスター

ベッドが高い、または車輪のロックが不十分だと、立ち上がる瞬間に足が安定せず、ベッドも動く。

③ ベッド周囲の移動スペース

ふらつきが強い人は方向転換で大きく揺れる。椅子や家具との間隔を広げ、一本の安全な動線をつくる。



起立・方向転換・最初の一步が最も不安定

④ ナースコールが見えない

自分のできる患者ほど一人で動きやすい。なるべく、利き手側の手元へ固定する。

⑤ ベッド柵と降りる側

普段降りる側に柵があると、またぐ・回り増える。患者の動作に合わせて位置を調整。

⑥ 点滴スタンドの脚・車輪

足が引っかかりやすく、支えにすると動くから外し、必要時は職員が操作する。

⑦ 床に置かれたスリッパ

足を入れる動作でふらつきやすく、脱げ・ずきにつながる。かかとのある履物を定位。

現場で追加して確認すること

麻痺側・立位保持時間・トイレまでの経路・夜間照明・床の濡れ・薬剤の影響・補助具の適合・ベッドブレーキ・ナースコール位置を、本人の実際の動作を見ながら確認します。

※写真から確認できる範囲の課題発見です。患者の自立を尊重しつつ、転倒リスクは個別に評価します。

構想・プロンプト：鈴木敏恵 | 生成 AI：Open AI ChatGPT -5.6(2026/7/18)



- 医師国家試験合格発表表……………1面
- 「連載」看護のアジェンダ他……………2面
- 「インタビュー」AI時代の看護教育(鈴木敏恵)……………3面
- 「連載」院内研修の作り方・考え方(新)……………4面
- 「美学」こそが組織における重要な課題(舟橋聖子)……………5面
- 「寄稿」「死にゆく患者とどう話すか」と突きつけられたあの日から……………6面

2017年4月24日(月曜日)(3面)

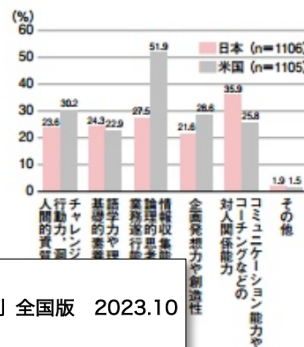
AI時代の看護教育 「意志ある学び」を実現するために

interview 鈴木 敏恵氏 (シンクタンク未来教育ビジョン 代表) に聞く

「AIに奪われる仕事」が話題になる中、教育の分野は「知識を与えるだけの教育」から「知識を与えない教育」へと転換している。看護教育もアクティブラーニングをはじめ、能動的な学習方法が積極的に取り入れられつつある。その学びを実践でさらに生かすために、教員は学習者をどのように教え導けばよいのだろうか。本紙では、オリジナリティあふれる教育手法を長年発信し続ける鈴木敏恵氏に、自ら学ぶ力を身につけるための教育と、これからの看護教育がめざすべきビジョンについて聞いた。

—先生はこれまで、看護教育へのアクティブラーニング導入など、従来の教育手法からの転換を訴えてきました。そのよきを提議があるのでしょうか。

A 知識やスキル
①基本 ②専門



●すずき・とし恵氏

シンクタンク未来教育ビジョン代表、教育クリエイター、一級建築士。日赤秋田看護大学院非常勤講師。教育界、医学界など高度専門領域におけるアドバイザーとして、プロジェクト手法やポートフォリオ評価、次世代教育構想コンサルタントを行う。大学FD構想、新人研修、指導者育成、キャリアデザインを目的とする人材育成などを全国で実施。『看護

日本経済新聞

日本経済新聞朝刊 全国版 2023.10

私見
卓見

DXで「意志ある学び」の実現を

シンクタンク未来教育ビジョン 代表 鈴木 敏恵

教育デジタルトランスフォーメーション(DX)の象徴として、子どもたちが1人1台の情報端末を持ち、紙の教科書に代わりデジタル教科書を活用できるようになった。一斉授業から自分のペースで学べる個別最適化への移行がキーワードだ。デジタル教科書は限られた文章と写真で知識を伝達していた紙の教科書とは異なり、視覚や音声による多様な表現で学べ、さらに深くデータや教材へリンクできる機能もある。しかく多くの場合、従来通り先生の指示のもと、授業時間に教室で展開されている。理解のしやすさには有効だが、先生が生徒に教えるというスタイルはあまり変わっていない。

ただ、これではDXとは言えない。DXとはデジタル化でこれまでの在り方が根本的に変わるからだ。DXは今までやってきたことをデジタル化することでも、生成AI(人工知能)に任せられることもない。デジタル教科書を教えるツールとして捉えるのではなく、欲しい情報がある時に、子どもたちが自身が獲得できる手段として生かす、という考え方もあるはずだ。

これから時代に求められるのはコンピュータやAIを活用できるスキルでも企業が求める人材を輩出する社会人基礎力でもない。求められるのはAIが不得意な新たな価値を創造できるアイデアや唯一性だ。そのためには新しい価値を創造できる知性と感性を備えた人間だからこそ果たせることを尊重する教育が必要となる。スキルの習得だけでなく、子どもたちが根拠を持って自分の考えを述べる機会をもっと増やすべきだろう。自ら未来へビジョンを描き、仲間とともに課題を解決しつつゴールへと向かえる力と、あふれる情報に翻弄されずに自分の頭で考える力がある。考えるためには自ら知識や情報を獲得することが重要で、事実や真実こそ大事だということ意識が欠かせない。

もし、学校で使っているすべての教科のデジタル教科書をまとめて検索する機能があれば、子どもたちが手元の端末で自ら欲しい知識や情報を的確に得られる。文部科学省にはそうしたシステムの開発にあたってほしい。

の活用が一般化する重要な能力¹⁾

なえる

アクティブラーニングをこえた看護教育を実現する

与えられた学びから 意志ある学びへ

鈴木敏恵

講義・演習・実習で「自ら考える力」をグンと高める!

DXとポートフォリオで未来教育

対話でかえる学びとキャリアのデザイン

鈴木敏恵

デジタル + ポートフォリオ・プロジェクト学習で教育が変わる

AI時代 人間にしか果たせない新たな価値創造

入門編 でもあり 発展編でもあり バイブルでもある

AI時代の教育と評価

意志ある学びからなるプロジェクト学習 ポートフォリオ 対話コーチング
鈴木 敏恵 著

アクティブラーニングからアクティブラーニングへ
生きるということとは「読書」を見ること
授業への評価
新しいカリキュラムで学べるスキル
情報を活用する力 一タリタリスキル
AI時代のリテラシー 対話 検索 共有 リフレクシング

教育出版